

岡山大学交換留学プログラムEPOKの受入状況と EPOKカリキュラムの取組

Past and Current Status of the EPOK Inbound Program:
Development of EPOK Curriculum

大林 純子
Junko OBAYASHI

岡山大学全学教育・学生支援機構
教育研究紀要
第2号 2017年12月

岡山大学交換留学プログラムEPOKの受入状況とEPOKカリキュラムの取組

大林 純子

Past and Current Status of the EPOK Inbound Program: Development of EPOK Curriculum

Junko OBAYASHI

要 旨

協定校との交換留学プログラムEPOKの過去19年にわたる受入状況は、とりわけ平成26年度以降、協定校数の増加と呼応して受入人数において増進している。受入学生の8割は平均して英語圏の出身者であるものの、出身国は多様化する傾向にある。EPOKではこうした受入学生のニーズや変遷に応じて英語による科目の編成に取り組んできた。特に平成28年には、EPOKコースの修了カリキュラムを設定し、以後カリキュラムの改善にも取り組んでいる。EPOKの教育科目の更なる体系化は今後の課題である。

キーワード： EPOK, 交換留学生, 受入学生数, 受入カリキュラム, 教養教育科目

1. はじめに

岡山大学交換留学プログラム（Exchange Program at Okayama 略称EPOK）は、平成10（1998）年10月に仮発足、翌平成11（1999）年4月に正式に施行開始された。（中村、2002）この間に、協定校は発足時の4カ国14校から平成29年度現在14カ国44校に拡大し、受入学生数は初の受入となった平成10年度の2名から平成29年度現在38名と着実に増加している。

交換留学を軸とする教育現場では、「国際的」人材育成への指向は、その文言を「グローバルな」人材育成と置き換えたが、本質的には日本人学生と海外学生のモビリティと交流を採りこむことによる異文化教育と経験の促進という目標とする点で一貫している。一方で、進化するインターネット環境や国境を越えた文化のグローバリゼーションは、交換留学生を対象とする教育プログラムのコンテンツやアプローチに影響を及ぼしていると言える。また、本学の交換留学プログラムを施行する環境も、基幹教育としての日本語教育と国際センター（現グローバルパートナーズ）の組織分化を含む受入体制の変化や、岡（2012）が指摘するところの「受入教員のめまぐるしい交替」、近年では平成26（2014）年度のスーパーグローバル大学創成支援事業（通称SGU）への参入、平成28（2016）年度のクォーター制・60分授業導入、平成29（2017）年度グローバル・ディスカバリープログラムの開始などに応じて変遷してきた。

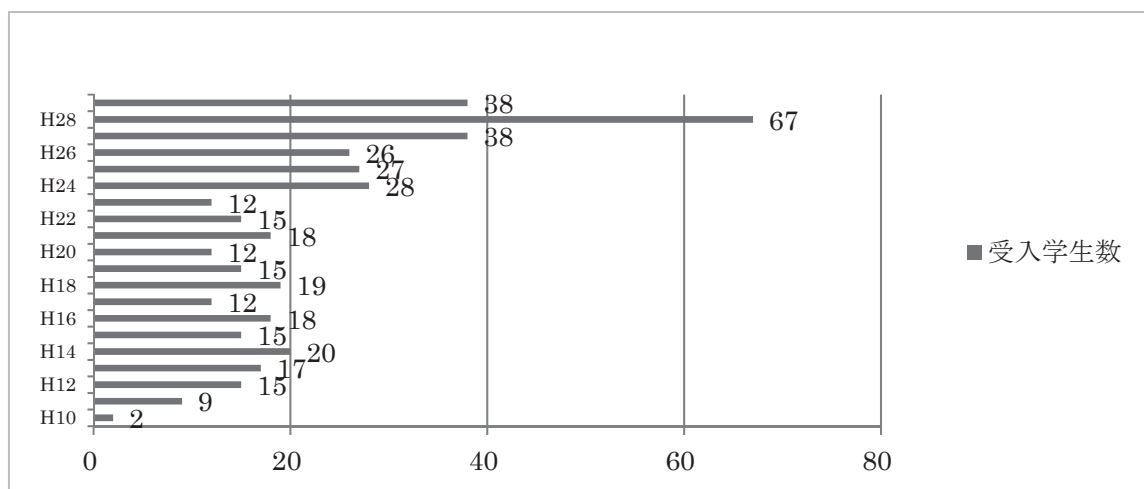
こうした教育環境の変遷を念頭に、20年の節目を前にEPOK受入プログラムにおける取組の変遷と進化を概観するにあたり、特に本稿では、EPOK受入状況の傾向を把握したうえで、EPOK留学生を対象とする学習カリキュラムの構築について報告する。まず、開設から平成29（2017）年

度までのEPOK受入の概況を示す。次に、EPOK受入プログラムの中心となる英語による授業科目の構成に着目し、その変遷を平成28(2016)年度におけるクォーター制への対応を中心に報告する。最後に平成28年度から取り組んでいるEPOKカリキュラムの構築について示し、今後の展望を探ることとする。

2. 受入状況

2-1. 受入学生数の推移と出身国別内訳

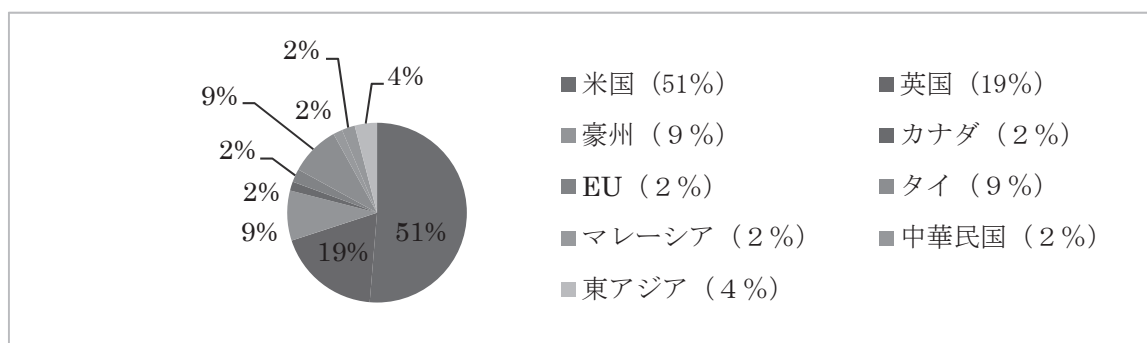
平成10(1998)年度から平成29(2017)年までのEPOKで受け入れた総学生数は421名である。図1は、各年度のEPOK受入数の推移を示している。



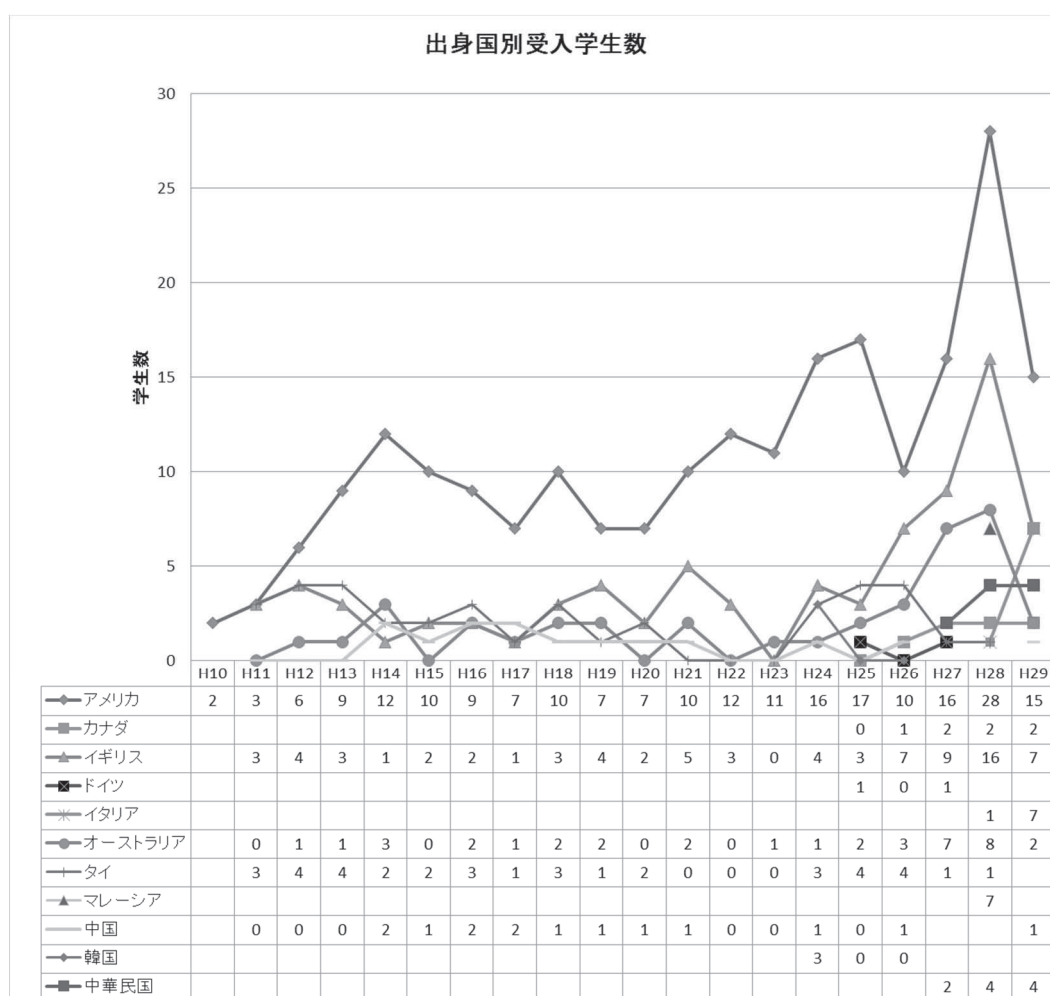
〔図1. EPOK年度別学生受入数〕

図1からわかるように、受入数は平成28(2016)年の突出した67名を例外とすると全体に緩やかな伸びを示している。平成11年を初年度として五年毎を一期として受入人数の年度平均値をみると、第一期(平成11年から平成15年)から第二期(平成16年から平成20年)までは年間15名、その後第三期(平成21年から平成25年)では20名、平成26年から本年度までは39名というように、年間の受入数はSGUに対応して著しく増進の傾向にあるといえる。また、EPOK受入学生は半年または1年在籍するが、2014年から2016年の統計によると約75%が1年間在籍することから、近年では毎学期概ね35名から45名の学生が在籍しているといえる。

延べ421名のうち、英語圏(米国、カナダ、豪州、英国)からの受入数は約8割の341名を占め、残りの2割が非英語圏(ドイツ、イタリア、フランス、タイ、マレーシア、中国、韓国、中華民国)からの受入学生である。図2が示す通り、国別の総受入状況では米国からの学生が51%と約半数を占め、次に英国が19%、豪州とタイが9%と続く。比較的協定交流関係が新しいカナダ、EU、マレーシア、中華民国は各2%である。中国と韓国は合わせて全体の4%である。



[図 2. 受入学生の国(地域)別内訳]

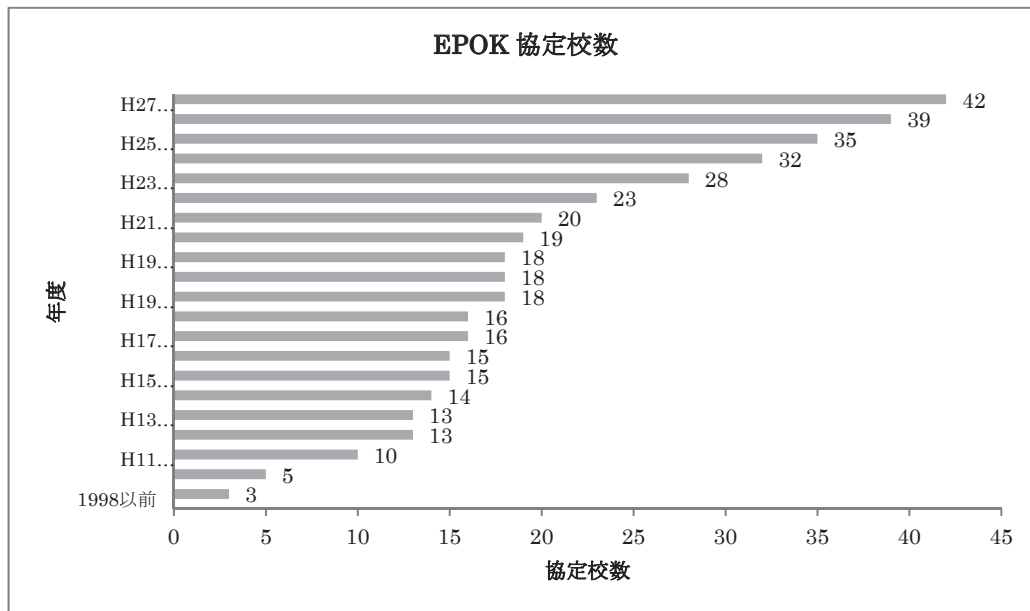


[図 3. 国別EPOK受入学生数の推移]

図 3 からは国別の受入推移が見られる。英語圏からの学生の割合が、平成27年は89%、平成28年が80%、平成29年は68%と推移しているが、いぜんとして多数を占めていることが確認される。しかし同時に、平成25年以降は出身国数が増進傾向にあることがわかる。では次に、受入数の増進と出身国別の傾向について、その基盤要素となるEPOK協定校の推移について観察する。

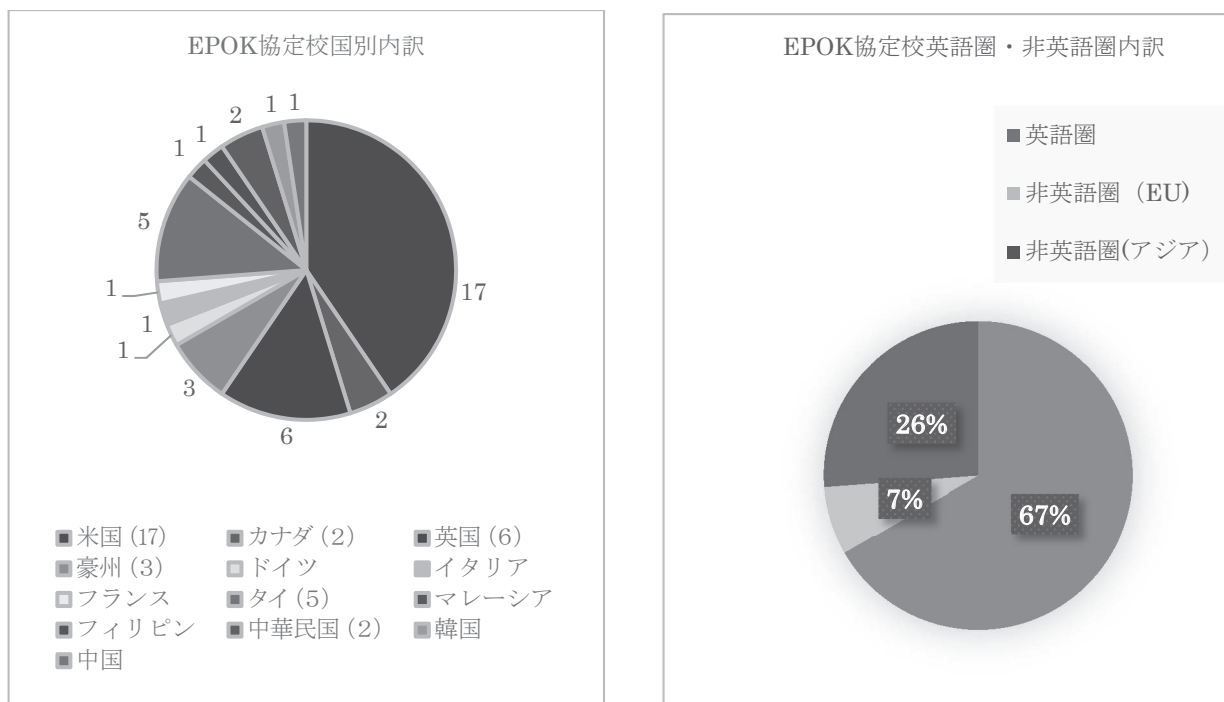
2-2. 協定校の推移と協定校の地域別内訳

図4のグラフから、EPOK協定校数は、とりわけ平成24年度(2012年)以降に著しく増進していることがわかる。



[図4. EPOK協定校数の推移]

また、協定校の分布は、図5に示すように、英語圏が67%、非英語圏（欧州、アジア）が33%である。このことから、実受入学生の出身国や出身圏では平均して英語圏（北米、英国、豪州）が8割を占めるが、協定校の割合からみると非英語圏が3割を占めていることは見逃せない。



[図5. EPOK協定校の国別内訳、英語圏・非英語圏による内訳]

EPOKプログラムは、開講授業のみならずプログラムの進行に係る共通使用言語を英語として開講してきた。実受入学生の割合からみると合理的といえるし、EPOKの開設以来「国際＝英語」といった概念は否めないものであったともいえよう。少数グループとなる非英語圏からの受入留学生は、概して日本語能力が高い（例えば本学の日本語クラスレベルでは5から7までの上級）場合が多い。したがって、必ずしもEPOKで提供する英語による教養教育科目の受講率は高くはない。「グローバル教育とは何か」を本論で論ずるものではないが、少なくとも、こうした協定校の拡大は、本学の交換留学によるグローバル教育が本質的に文化の均一化ではなく多様化を重視するグローバリゼーションにこそ対応し得る人材の育成を指向していることを意味している。そうであるならば、非英語圏からの受入学生が「英語プログラムにおける少数派」という位置づけになる英語中心の教育プログラムではなく、幅広い受入学生の文化的背景や留学目的をより活かすことのできる幅広いEPOK教育プログラムが早晚必要になるといえるのではないだろうか。このことは、近い将来の課題として認識しておきたい。

3. EPOK教育プログラム（日本語コースを除く）

3-1. 平成25(2013)年度までの開講科目

表1は、平成25年度のEPOK生対象科目とその受講者数を示す。各学期の科目数は15および16科目で、年間科目総数27科目のうち13科目がグローバルパートナーズ教員の開講科目である。

所属	科目名	平成 25 年(2013 年)	
		前期	後期
(薬)	A Guide to Modern Biology【現代生物学入門】	2	
(経済)	Political Economy of Modern Japan【日本経済と政治の諸問題】	2	
(医)	Introduction to Life Science【ライフサイエンス入門】	1	
(理)	Frontier of Chemistry【化学のフロンティア】		0
(工)	Frontier of Natural Science【自然科学のフロンティア】		
(農)	The Cutting Edge of Agricultural Sciences【農学の最前線】		1
(文)	Materialism in Japan and the West【物質観：西洋と日本】		1
言語	Intercultural Communication	3	
	Expanding Cross-Cultural Language and Communicative Skills	3	
	Intercultural Communication		3
	English Language Assistant and Cultural Informant	5	6
	Introduction to Japanese Culture【日本現代文化】	2	11
	Global Studies1【グローバル文化論 1】	0	1
GP	Japan's War and Peace【戦争と平和】	2	
	World Conflicts and Peace【紛争と平和】		3

	Energy and Global Environmental Issue for Japan 【日本のエネルギーと環境問題】	5	
	Politics and Economy in Southeast Asia 【東南アジアの政治と経済】		1
	Asia in the World: towards the strategic partner 【アジアのなかの日本】	2	
	Japanese and Nature		9
	Public Speaking 【口語表現】		5
	Japanese Linguistics	4	
	Introduction to Sociolinguistics 【社会言語学入門】	6	
	People Crossing Borders and Japan 【越境する人々と日本】		7
	◆Kanji for Everyone ! 【日本語補講】	0	
	◆Study of Japan 【日本事情】	13	14
	◆日本学 【Japanese Studies】		7
GP/部局	◆Independent Study 【個人研究】	3	1

[表 1. EPOK留学生対象科目 平成25年(2013)]

EPOKコースは英語で行う講義で構成されている。この年、「日本学」は日本語学習者が平易な日本語により受講することのできるコンテンツ科目として試行的に開設された。また、各学部（薬・経済・医・理・工・農・文）開講の専門・教養教育科目7科目はEPOK開設後の初期から継続して開講されており、EPOKの学習カリキュラムを学際的コースにしてきた。

中村(2002)によると、平成14年度（2002年）には英語による講義11科目10科目が教養教育総合科目として開講されることとなり、日本人学生との共修が実現した。当初より、英語による講義は、日本人学生との共修に関して留学生と言語能力やニーズの差が課題となるものの、「EPOK教育科目の中でも中核となる科目」であることから数と内容の充実が将来に向けて期待されることも指摘されている。そこで、英語によるEPOK科目のその後の展開について検索を試みることにする。平成17年(2005年)までは、先述の学部開講（EPOK）教養教育科目にスポーツ科目とセンター所属EPOK担当教員による開講1科目を加えた8科目（前・後各期）の構成が続いた。平成18年(2006年)には言語教育グループから新たに「Intercultural Communication」や「English Language Assistant and Cultural Informant」の科目が加わった。その後、教員の交替や増員に伴い、平成24年(2012年)までに年々1科目から2科目が加えられて科目数は13科目になった。

表1にみる平成25年(2013年)の科目リストをみると、学部提供科目に加えて、文化、社会、環境、国際社会といった一定の選択肢を提供することができている。英語による科目数の増進もある程度達成されている。しかし、科目数の一途な増進を図るのみならず、考えるべき課題もあった。受入留学生にとって有用かつ魅力的な科目はどのような科目か、EPOKが目指す教育の目標は何か、それに沿ったコース科目やカリキュラムは如何なるものか。EPOK開設以来、常

に問われてきたに違いないこれらの課題に対して、改めて目標やニーズをアップデートしながらEPOK科目を整える必要が認識された。特に、センターの提供科目に関しては、構成教員の変更に伴って、科目数、ジャンル、内容が変動することが問題であり、この問題はいぜんとして取り組むべき課題となっている。

3-2. クォーター制にともなう平成28(2016)年度の開講科目

表2は、平成28年度のEPOK生対象科目と各開講クォーターの受講者数を示す。各学期の科目数(Independent Studyを除く)は16科目(Q1)、14科目(Q2)、17科目(Q3)、18科目(Q4)である。これは、平成26(2014)年度前期14科目および後期14科目、平成27(2015)年度前期18科目および後期16科目であった開講科目数が、クォーター制に移行後も維持されていることを示している。当然ながら、年間の提供科目数はおよそ2倍に増加している。

平成28年度には、新規にEPOK留学生の必修科目として「Japanese Studies (日本研究)」を開設した。これは前年度から試行していたEPOKリサーチプロジェクトプログラムを必修科目として設置したもので、後述するEPOKカリキュラム(修了要件)に繋がる。

[表2 EPOK留学生対象科目 平成28年(2016)]

所属	授業科目名	平成28年(2016年)			
		Q1	Q2	Q3	Q4
(経)	Political Economy of Modern Japan【日本経済と政治の諸問題】	2	2		
(医)	Introduction to Life Science【ライフサイエンス入門】	2			
(農)	The Cutting Edge of Agricultural Sciences【農学の最前線】			4	5
(工)	Frontiers of Natural Sciences【自然科学のフロンティア】				
(文)	History of Bizen Ware and its Connoisseurship【備前焼の評価の歴史と鑑定】				8
言語	English Language Assistant and Cultural Informant	6	6	17	16
	Intercultural Communication	5	6		
	Intercultural Communication	6	7		
	Social Issues from Cross-Cultural Perspectives			11	28
	Language, culture, and social interaction			19	15
	Cross cultural communication topics using film		5		
	Model United Nations Preparation Course	4		4	
	Japanese culture through Ghibli animes【アニメ:ジブリアニメから学ぶ日本】	11			
	Introduction to Japanese Pop Culture【日本のポップカルチャー紹介】			14	
	Service-Learning 1		4		2
GP	Teaching English in Japan【TEFL 入門】	8	6	13	12
	Job Search for International Students I	4			9

	Japanese Communication in Business 【日本ビジネスコミュニケーション】	5	1		
	Japanese Business			2	2
	Japanese Cuisine 1 【日本食と文化】		20		15
	Study of Kyoto under the surface 【素顔の京都を学ぶ】			13	12
	Working in Cross-cultural organizations【異文化組織で働く】	4			
	Effective Proposal Writing 【効果的なプロポーザル作成法】			2	
	International cooperation and project management 【国際協力とプロジェクト管理】				4
	Area studies: Approaches and methodologies 【地域研究：アプローチと方法】		1		
	Sustainable development through community base learning 【学びを通じた持続可能な地域づくり】			5	
	Education for All in Japan and the global context 【万人のための教育】				5
	Cultural History of Japan through Chado 【茶の湯にみる日本的美と文化史】	4			
	Chado: Mind and Practice【茶道の作法から学ぶ日本的礼法】		9	8	
	Cultures and Issues in the Pacific Islands 【太平洋諸島地域の文化と社会】				12
	Japan's Culture Heritage Course 【日本文化遺産】			10	11
	◆Study of Japan 【日本事情】	18	17	26	22
	◆Study of Japan Inaka 【日本の田舎を知る】	12		15	
	◆Homestay	6	5	10	12
	■Japanese Studies 【日本研究】	39	37	44	19
GP/部局	◆Independent Study【個人研究】				8

3-3. EPOK留学生の履修動向

EPOK生は、留学生の在留資格要件である週あたり10時間の授業時間を満たす科目数、すなわち2学期制においては7コマ（例えば日本語基礎コースは週に4コマ開講される）を最低履修科目数として従来指導されてきた。最低コマ数に係る議論は教務委員会でも扱われたし、学生へのアンケートでも模索されたが、EPOKの教育プログラムとしての最低コマ数を設定するに至らなかった。しかし、履修指導では過去の実績等を参考としたうえで「10コマ以上」を目安に履修計画を立てるよう推奨指導した。

平成28年度のEPOK留学生の科目履修状況について、授業コマ数を基準に数値化すると、各クォーターの履修コマ数平均は9.9コマ、そのうち日本語科目は約5.5コマ（約55%）、EPOK教養教育科目は4.4コマ（44%）であった。2学期制として換算すると学期毎の履修単位数平均は18.5単位である。（「平成28年度EPOK受入業務報告」大林）これを、平成25(2013)年度秋期受入学生のデータ、平均8.7コマ（学期当たり17.3単位）のうち、日本語科目65～70%、EPOK科目25～30%と比較すると、総じて平成28年度では、約1単位分の履修学習時間数増加が観察できる。また、内訳に関して、日本語科目：EPOK教養科目＝5：4 の割合となり、日本語学習とEPOK科目のバランスが

ある程度均衡した履修傾向がよみとれる。日本語学習はEPOK留学生の留学の目的としては依然として第一であるものの、総体として増進したEPOK教養教育科目数と幅は、履修単位の互換の可能性の増進を含めて学生の履修実績の増進に貢献しているのではないかと推察する。しかしながら、まさに総体としてのEPOK教育プログラムの定義とそれを具現化するEPOK科目のジャンルや内容の整備は今後の課題である。

4. EPOKカリキュラムの構築

4-1. 平成 28(2016)年度 EPOK カリキュラムの制定

EPOK 教育プログラムの定義づけという意味から、平成 28(2017)年度には EPOK 修了要件を策定し、これにもとづいて EPOK「study japan」修了証を付与するという形を整えた。EPOK 修了要件は、(1) 各学期(1 および 2 クォーター、3 および 4 クォーター)に 14 単位以上履修すること (2) EPOK Research Project 1 および 2 (計 2 単位)を履修すること (3) 最低 1 科目の日本語科目と最低 1 単位の EPOK 科目を履修すること、とした。

「EPOK Research Project」は、平成26(2014)年から実施していた修了エッセイ・プログラムを個々の日本学習のテーマに沿ったリサーチプロジェクトと位置付け、必須科目として開講することとしたものである。EPOK Research Project はEPOK Research Project (I)および(II)で構成され、(I)ではリサーチのテーマ設定からリサーチメソッド、文献調査、アウトライン作成を行う。EPOK Research Project(II)は、エッセイ作成、概要(翻訳)、エッセイ文集作成、EPOK生の学習成果発表の場としてプレゼンテーションを行い、修了の要件としている。

4-2. 平成 29(2017)年 EPOK カリキュラムの改訂

EPOK 教育プログラムにおいて、留学生の学習目標をより明確に設定することを念頭に、平成 29 年度中に EPOK カリキュラムを見直し、その要件を改訂した。すなわち、EPOK は語学研修プログラムではなく、日本語コースのみの履修を奨励しない。同時に、日本について学習するという地域研究のアプローチとして日本語を学習することを必須とする。また、一分野に偏らず、日本に係る科目を学際的に履修することを奨励する。個々に設定する学習テーマについて自立的に行うリサーチの質を保証するため、リサーチプロジェクト科目は、留学期間を通じて取り組むこととする。

修了要件は (1) 各学期(1 および 2 クォーター、3 および 4 クォーター)に15単位以上履修すること (2) 各学期中、EPOK Research Project 2 単位を履修すること (3) 「日本文化と社会」、「異文化コミュニケーション」、「自然科学」の各ジャンルに属するEPOK推奨科目を各ジャンルから 1 科目ずつ、計 3 科目以上履修すること (4) 日本語科目を 4 単位以上履修すること (5) 「日本事情」を 2 単位履修すること。

このEPOKカリキュラムは平成30年度に開始するものである。

5. EPOKの教育カリキュラムの課題と展望

EPOK科目について、科目群(ジャンル)を定め、交換留学生が学際的に日本について学ぶカリキュラムを整える試みを開始することとなった。しかしながら、英語で提供する教養・専門科目

としての個々のEPOK科目はいまだ流動的な構成にならざるをえない。平成29（2017）年度に開講されたグローバル・ディスカバリー・プログラムとの協働を含めて、EPOK教育カリキュラムにおける科目構成を検討する課題は未だ残っている。

グローバル化にともなう異文化理解あるいは自文化理解の教育環境の変化は著しい。情報や移動が既に著しくグローバル化した現代社会に生まれた留学生や日本人学生が「異文化としての日本文化」あるいは「自国文化としての日本文化」を学ぶ意味やアプローチは、EPOKが辿ってきたこの20年の間にも着実に変化しているといえるだろう。本論の前半で解析をしたように、受入留学生数は増進し、その出身国も多様化している。日本人学生と共修する教養教育科目を通じて日本を学ぶことの意味や方法についても検証する必要性は大いにある。これらの点をふまえて、多様な留学生のニーズにも対応することのできる有効かつ魅力のあるEPOK教育カリキュラムが、今後も更に模索されなくてはならない。

参考文献

- 中村和泉(2002)「岡山大学短期留学特別プログラムEPOK－3年間を経過した受け入れプログラムの現状と課題」岡山大学留学生センター紀要第9号
- 中村和泉(2003)「岡山大学短期留学特別プログラムEPOK－「英語による授業」改善への取組と課題」岡山大学留学生センター紀要第10号
- 岡益巳(2012)「EPOK受入れ学生の諸問題」大学教育研究紀要第8号